

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 3 月 1 日
 所 属：生命・環境科学部 食品生命科学科
 氏 名： 澤野祥子 職位： 准教授
 役 職： 食品生命科学科 副学科長

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

大学では、食品生命科学科の主に、機能分野の科目を担当している。カリキュラムツリーの流れの中で、学生に専門知識を着実に定着させることを意識して授業を行っている。実習科目については、実験手技の向上はもちろんのこと、レポート・プレゼンテーションなどの発信力も磨けるようなシラバス作成と授業運営を心掛けている。

大学院では、環境保健科学専攻に所属する学生に開講している食品健康科学分野の講義を担当している。学生自身が将来のための学びを主体的に深めていけるようなサポートができるよう教育・指導を行っている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
食物アレルギー論	食品生命科学科	選	3年次	54名
応用栄養学	食品生命科学科	選	3年次	62名
食品バイオテクノロジー	食品生命科学科	選	3年次	57名
基礎化学実習	食品生命科学科	必	1年次	57名
食品学実習	食品生命科学科	必	2年次	43名
食品開発 PBL 実習	食品生命科学科	自	2年次	21名
卒業論文	食品生命科学科	選	3,4年次	13名
食品健康科学特論	環境保健科学専攻	必	M1	5名
科学者・研究者論	環境保健科学専攻	必	4年次, M1	21名

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

大学教育では、食品関連の知識を不足なく学生に定着させることを念頭に置いて教育業務を行っている。例えば他大学にも自身の担当科目に該当するような履修科目があると思われるが、本学を卒業した学生も他大学を卒業した学生と比べて遜色ない知識を得られるよう、該当科目の中で一般的に教育される事項は漏らさないように、かつ、内容も充実させるよう心掛けている。また、「分かる」ことは学びの楽しさの根源だという思いもあるため、

「分かりやすさ」に重きを置いて、勉強の楽しさを学生に体感してもらえることを目指している。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

先述の教育理念の実現のため、大学生として持つておくべき必要な知識や技術など、食品分野の素養を授業や実習の中で植え付けることを重要視している。卒業してから食品分野に進んで働く学生はもちろんのこと、食品分野に進まない学生にとっても「食」は生きる上では欠かせないものであるため、大学での学びがそれぞれの学生の血となり肉となって卒業しても頭の片隅に残っており、学んだことを活かしてくれれば本望である。そのためにも出来るだけ、入門の知識から入り「誰にでも分かる」というレベルから、徐々に専門的な知識に段階的に移行していき、該当科目に対して最終的に大学生レベルの素養を持って単位取得できるように14回の授業を構成している。

アクティブラーニングについての取組

座学については、14回の授業中に1回以上はグループワークの時間をとるように心がけている。既に習った単元の復習を兼ねて行っているが、他のメンバーとの知識の差が如実に表れるため、それぞれの学生にとって良い刺激になると考えている。また、授業が一方通行にならないよう、授業の後半では該当回の内容を振り返る確認問題を解く時間を設け、答え合わせと解説を毎回実施している。その問題は次の週に、小テストとして出題し、スモールステップで知識の確認と蓄積ができるよう工夫をしている。

実習については、実験結果をレポートで提出するだけでなく、スライド課題も課している。実験は手を動かすことも大事だが、それと同等にデータを正確に整理して結果を示し、結果から考えられることを導き出す能力が必要だと考える。また、それを他人に発信する力も同様に重要だと考えている。したがって、実験以外のレポート作成やスライドプレゼンテーション作成も手厚く授業の中でフォローするように意識している。

ICTの教育への活用

學理や Google ドライブなどのツールを積極的に活用し、授業を実施している。2022年度以降、対面授業中心の形式に戻ったが、学生にとって有益な教材を提供するため、実習の動画撮影・編集などの動画制作も引き続き実施している。特に実習前に事前動画視聴の機会を作っていることは学生の理解に役立っているようであり継続して実施している。今後も ICT教育の有用なところは残しながら授業運営をしていきたい。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C） B

「できるだけ分かりやすく」を心掛けて授業を実施している。そのためにスライド資料や教材も字が多いものよりも写真やイメージ図が多用されており、直感的に理解できる教材

を選択・作成するようにしている。動画・映像教材も使用できるものは授業内で使って、五感で印象に残るように工夫している。

②学生の理解度の把握 (A~C) A

ほぼ毎回、授業はじめに小テストを行い理解度の確認を行っている。また、全授業の半ばには中間テストを実施しており、それらの実施により成績上位・中位・下位学生および、指導が必要な学生を把握することが可能である。

③学生の自学自習を促すための工夫 (A~C) B

小テストを課していることで、自宅や授業前の復習がしやすい状況になっていると感じる。また、授業評価アンケートにも小テストがあることで理解の助けになっているという声ももらっている。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (A~C) B

日頃の授業では全体への授業教授や声掛けが中心となり、個々の学生とのコミュニケーションを十分に取る時間があまり設けられないため、小テストの最後にコメント欄を設けて、学生が自由に質問や意見を記載できるようにしている。オンライン実施になって以降、メールなどの媒体で質問をしてくる学生の割合が増えたように感じる。

⑤双方向授業への工夫 (A~C) B

小テストの平均点が悪いなど、全体的に理解度が低いと感じる单元などは説明を加えたりなどの補填を行っている。また、集団授業においても出来るだけ一方通行にならないよう、要所所で質問の時間を設け、理解度を確認している。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

非該当

5.学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

授業評価で好評だった点は続け、不評だった点は改善を試みている。例えば「分かりやすい」というコメントについては「十分理解できている」と捉え、単元の難易度を据え置いている。授業評価アンケート収集の際にコメント欄に、分かりやすかった単元と分かりにくかった単元を具体的に書くようお願いしているため、難しいと感じたところについては、次年度に難易度を落としたり、長く説明したりなど、反映させている。実習についても、興味深いと感じる学生が多かった実習とそうでない実習をアンケートで回収し、進め方の改善

点などが具体的にあれば、次年度のシラバスや実習で反映できるものは反映させている。

② ①の結果はどうか。

実習の進め方や事前学習、事後学習について、教員-学生間の齟齬が少なくなり、年々評価が相対的に上がってきており、満足度の高いコメントが多く得られるようになってきていると感じる。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

学生に好評だった点をさらに意識して、次年度の授業に活かしていきたい。改善点についても、変えられるものについてはすぐに改善したい。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

授業の終わりに、学習した内容のまとめ問題を解いてもらい、模範解答を解説することで、その日の授業のダイジェストを簡単に行う。翌週の授業の始めに、前週行ったまとめ問題と同じ問題を用いて、小テストを行う。毎週少しずつ覚えていくので、記憶の定着が図れる。

また、小テストの採点は教員自身が行うため、どこでどのくらい理解できているかの把握ができ、間違いが多かった問題については詳しく解説するなどの対応ができる。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

- ・ 授業：「分かりやすかった」という学生の評価を得ている。
- ・ 実習：各々の学生から提出されたプレゼンテーションスライドを無記名作品として學理上に展示し、学生自身がベストプレゼンテーションを投票する試みを行った。評価者の立場になる経験が新鮮だったこと、上位に選ばれた学生は皆のコメントが自信になったとの声を得た。
- ・ 卒業論文研究：研究室所属学生が古泉賞を受賞した。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

可能な限りFD研究会には参加するようにしている。予定がある、もしくは遅い時間帯に実施されるFD研究会については、オンタイムで参加できないものの、後で映像を見て参加することで補填している。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

短期的な目標：

- ・ 授業担当科目を履修している学生の顔と名前を全て一致させることから取り組んでいく。
- ・ 個々の学生の理解度の把握に努める。

・脱落学生のケアを早め実施する。

長期的な目標：

・成績上位・中位・下位者に応じて、アプローチを柔軟に適応し、授業あるいは研究活動のやる気を引き出し持続させる。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

授業評価アンケート、シラバス